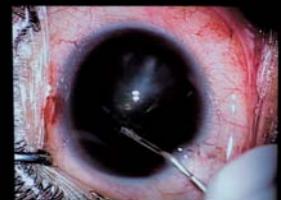




臨床と研究の 一体化と病診連携で 世界最高水準の 医療をめざす。



人間が獲得する情報の8割以上は、視覚にあるといわれる。その視覚を、より良い状態に保ち、改善するのが眼科医の使命だ。臨床と研究の一体化をめざし、病診連携による診療で優れた実績を誇る金沢大学病院では、専門別研究グループによる世界最高水準の医療に取り組んでいる。それぞれの分野で今、どのような治療や研究が行われているのか紹介しよう。

眼科のあらゆる専門家が 揃った拠点病院

眼科の三大疾患は、すでに外科的治療として普及している白内障を除けば、緑内障、網膜疾患、角膜疾患とされている。金大病院の眼科は、この三大疾患を臨床と研究の柱に、それぞれの専門別研究グループを構成している。緑内障グループ、網膜グループ、角膜グループ、

これに眼窩・腫瘍や、外科的治療の対象となりにくい網膜変性疾患、ぶどう膜炎、神経眼科などの疾患を扱う専門分野もある。

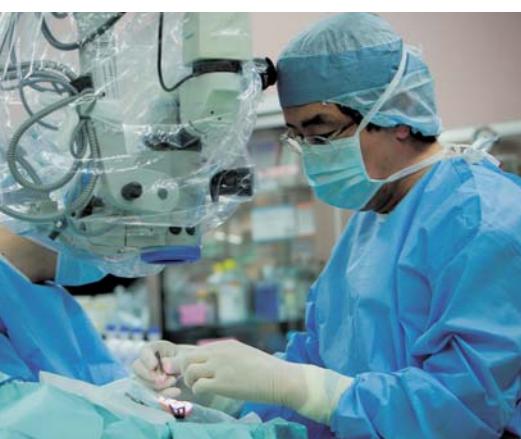
臨床面においては、緑内障手術、網膜硝子体手術、角膜移植、斜視手術、眼瞼眼窩形成手術など、専門性の高い眼科関連の手術をほぼ網羅し、実施している。

「臨床の疑問、テーマはベッドサイド（現場）にあり、研究は臨床のためにある」という杉山和久教授は、眼科の研究、治療方針について次のように説明する。

「臨床と研究が一体化した教育を推し進めながら、世界最高水準の医療の提供をめざすことを基本にしています。

私の専門は緑内障ですが、この分野の臨床、研究で金大病院を日本の拠点にしたい思いがあります。緑内障以外でも、網膜の研究、治療は世界的レベルの実績があり、今でも先進的な研究、治療を引き継いでいます。角膜の分野では、金大病院にしかできない最先端の移植手術などに取り組んでいますし、眼窩や腫瘍、涙道の専門家、内視鏡の専門家、神経眼科の専門家、最近立ち上げた斜視・弱視外来など、眼科のあらゆる分野の専門家が揃っています。金大病院は、そうして一流の専門家が揃った拠点であり、それが分野で最高水準の医療を提供できる拠点病院だと思っています」

ちなみに、臨床面における実績のうち、緑内障の手術は年間約200例を数える。二〇〇三年～二〇〇六年の緑内障手術件数は全国でトップ5にランク。網膜硝子体の手術件数はここ5年間で1.5倍に、角膜移植についても年間40件を数え、ここ5年間で10倍近いという増加率だ。



緑内障手術を執刀する杉山教授

関連病院との「病診連携」がバツクボーン

一方、北陸を中心に約40の関連病院や施設と、金大眼科のOB（同門会）で開業した先生との「病診連携」も進めている。北陸3県に網の目のように拡がった関連の医療機関と提携しており、その連携、ネットワークが有機的に機能しているのも眼科の強みだ。

この病診連携も、眼科ではきわめて重要な方策に位置づける。杉山教授は「関連病院では治療がむずかしい重症患者を、金大病院で治療してふたたび関連病院にお返しする。こうした紹介と逆紹介の積み重ねによって、私たちの医療が北陸の隅々まで行き渡る。それ



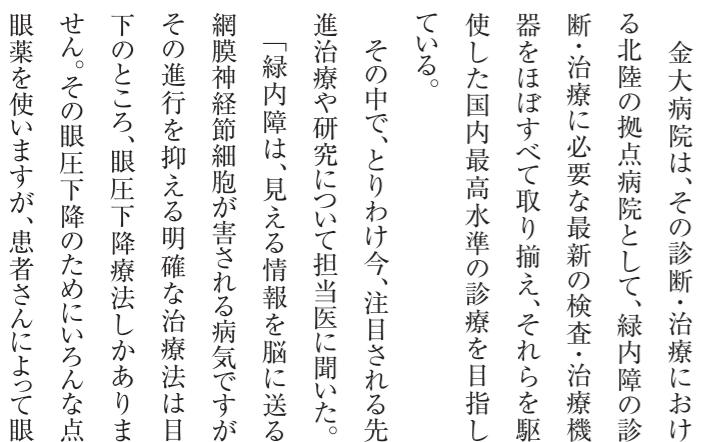
(上) 緑内障患者様のゴールドマン視野。視野狭窄が進み、中心に及ぼうとしている。(左) 緑内障手術を見学する医学生。

向性について、杉山教授は次のようにアピールする。

「視神経の再生医療がますます注目されるとと思います。緑内障は、視神経の病気ですが、分子レベルで治していくには視神経の保護、再生が重要です。角膜分野でも角膜内皮移植手術など新しい移植手術が注目されています。網膜分野にしても、再生手術はますます高度化し、重要ななつていくでしょう。研究面では、基礎医学との交流をもつと深めること。あとは海外施設、とりわけアメリカとの交流を図つて、臨床的な共同研究をもつと進めていきたいと考えています」

杉山教授は今後、医師主導の治験も必要になつていくと予想する。そのため医師主導の臨床研究のデータをいくつか集めて、そのエビデンスを日本で確立し、世界に発信していくというように、金大病院がそのマルチセンターの中心的な役割を果たしていく将来像も見据えている。

では、世界の最高水準をゆく眼科の先進医療に迫つてみよう。



緑内障患者様を診察する杉山教授

緑内障グループ

眼圧下降に向けた新しい治療と研究を確立

視神経の障害が進行し、失明にいたる緑内障は、ごくありふれた病気であり、高齢化に伴つて今後、ますます増加する傾向にある。日本緑内障学会の最近の調査結果では、40歳以上の日本人のおよそ5・0%が緑内障で、患者は約400万人と推測される。

金大病院は、その診断・治療における北陸の拠点病院として、緑内障の診断・治療に必要な最新の検査・治療機器をほぼすべて取り揃え、それらを駆使した国内最高水準の診療を目指している。

その中で、とりわけ今、注目される先進治療や研究について担当医に聞いた。「緑内障は、見える情報を脳に送る網膜神経節細胞が害される病気ですが、その進行を抑える明確な治療法は目下のところ、眼圧下降療法しかありません。その眼圧下降のためいろいろな点眼薬を使いますが、患者さんによつて眼

圧下降が一定ではない問題をはらんでいます。そこで、現在日本で使用されている点眼薬でもつとも眼圧下降作用が強いとされるラタノプロストと、その作用に不可欠な遺伝子の多型との関連を

調べたところ、プロスタグラランジンF.P.受容体のある遺伝子多型が、眼圧下降の強弱に関係していることがわかりました。この研究により、将来的に患者さんの遺伝子多型に基づいた点眼薬を選択する、テラーメイド医療の実現が期待されています」

視神経の再生医療が未来へのステップ

がきわめて重要だと考えています」と強調する。

その結果、この病診連携による紹介患者数は院内トップであり、金大病院内の全紹介患者のうち、眼科だけで18%、逆紹介患者も院内の14%に及び、眼科の大きなバツクボーンになつていています。同時に、関連病院や大学病院での問題症例をそれぞれ持ち寄り、年に数回、定期的にディスカッショնなども行つていています。

CLOSE UP NOW!
OPHTHALMOLOGY

PART1

眼科



画期的な薬剤で、重症の糖尿病網膜症に光明

まず、網膜研究グループが担当する硝子体外来では、主に網膜剥離、糖尿病網膜症といった治療に取り組んでいる。

で失明原因の2位にランクされ、早期の治療対策が求められている。グループの先進的な治療について、西村彰准教授が説明する。

「最新の検査機器を用いて検査を行
い、最先端の技術を駆使して年間約5
00件の手術を行っています。私たちの
研究分野における先進的な医療とし
ては、目下、糖尿病網膜症の重症患者
に対してもアバスチンという注射薬を、倫
理委員会を通して使用することが認め
られたことがあります。もともと
抗がん剤として開発されたのですが、
これを投与することで新生血管を一時
的に退縮させることができる画期的な
薬剤で、これと手術の組み合わせによ
りほとんど視力のない人が最高で1・0

ている。しかし、生命の危険はもちろん視機能の維持、美容の問題にも関連することから、放射線治療、化学療法、手術など、それぞれの症例に応じて治療法を決定していくことが求められている。旦那医が指導する。

「標準的治療法が確立しにくいのは症例が少ないと無関係ではありません。金沢大学だけではなく日本全体で症例、事例を蓄積して研究していく必要があります。診断、治療に際して



PROFILE 杉山和久

すぎやま・かずひさ●眼科・診療科長、教授。金沢大学医学部卒。岐阜大学、米国オレゴン医科大学研究員などを経て、2002年12月に、金沢大学教授に就任。専門は緑内障。日本眼科学会専門医。日本緑内障学会理事、日本眼科学会、日本眼薬理学会の評議員。

ISHIKAWA eye EYE BANK

アイバンクへの ご協力を！

眼科は「アイバンク」に力を注いでいるのも大きな特徴だ。現在、目が見えない視覚障害者は、日本全国で約35万人いるとされている。そのうち角膜移植によって視力を回復する人は約一割。その移植のドナーを「アイバンク」に頼っている。アイバンクは、1963年に日本で初めて慶応大、順天堂大に設立され、その翌年に金沢に「金沢眼球銀行」が作られたのが北陸での始まり。以来、ライオンズクラブなどが中心となり、これまで数多くの移植手術を支援している。1997年に「石川県アイバンク」となり、現在、金大病院内に事務局を置いている。

杉山教授は「これまで40例ぐらい手術を行っていますが、アイバンクの協力がなかったらできなかつたでしょう。今後ともより多くの皆さんのご協力、ご支援をお願いしたいと思っています」と呼びかけている。

臨床の疑問、テーマは
ベッドサイド（現場）にあり、
研究は臨床のためにある

新しい角膜内皮移植手術で 注目を集める



他の診療科との連携で 治療法を探る

眼科の中でも、眼球を扱う疾患ではなく、全身との関連で診断治療する分

内科など他の診療科と連携して治療や診断を進めていく症例が多い。患者の目となって治療の方向性を探り、研究と治療が今日も続けられている。光りを灯す道筋をつくる。そんな地道な

北陸の眼の腫瘍症例が

眼の重寫は、比較的稀な疾患とされ

大学への指導や学会でも羊膜移植の主導的な役割を果たしている。

それと並んで、新しい術式として平成18年9月に「角膜内皮移植（D.S.A.E.K.）」を実施、これも日本ではまだ症例が少ない先進医療として高い注目を集めている。

管黄斑症や、最近増えている黄斑浮腫とともに有効とされており、アバスチンを硝子体に投入することによって、血管中の血液成分の漏出を抑制することから視力の改善、アップに役立つものと期待されている。

術の比率が高い。金力病院では「九十九年に難治性眼疾患に対する「羊膜移植」手術が倫理委員会で承認されて以来、数多くの症例を重ね、二〇〇三年に厚生労働省から日本で初めて「高度先進医療」の認定を受けている。